

モロッコとスペインの農業地帯で

東京都立調布南高等学校 坂口陽子

2003年7月29日～8月7日、モロッコからジブラルタル海峡を経てリスボンまで、東京学芸大学加賀美雅弘先生ご案内の旅行に参加した。この旅行は、地中海地域の農業の変化や、モロッコ人の出稼ぎ問題など、多くの点で興味深いものであった。

地中海両岸の農業地帯は変わったのか

モロッコの1/3はアトラス山脈の北側にあり、地中海性気候の地域である。旅行の範囲は、カサブランカからタンジールまでだったから、今回はアフリカもヨーロッパも地中海性気候の地域を旅したことになる。現地を観察すると、同じ地中海性気候でも場所によってかなりの違いがあることが分かって、良い経験になった。

地中海性気候では夏は乾燥のため灌木や下草は枯れ、特別に水のある所だけが緑のはず。しかし見た範囲では、多くの地域で緑の木が茂り畑に作物が育っていた。カサブランカから北上するに従ってしだいにその緑の密度は増したが、乾燥の程度の違いなのか灌溉のためかは、分からなかった。

1990年夏のスペイン南部の旅で、EC援助の大規模な灌溉設備やダム建設をあちこちで見た。「乾燥気候の地域で、なぜ今ごろ灌溉設備建設なのか」と思った。日本では、水のコントロールが必要な水田が多いこともあって、灌溉はどこでも行き届いている。だから、スペインのような乾燥地域ではとくに灌溉が完備しているはずと考えていた。しかし、1990年のスペインの畑には、掘り返された土がそのままの形で固まった乾いた粘土が転がっていた。夏の畑に作物はほとんどなく、大地は茶色だった。

今回、スペイン南部の大地は野菜畑の続く緑色

だった。山は以前と同じに谷間以外は茶色っぽく、木のある所は木の葉の所だけが緑に見えたが、畑は灌溉のせいかな、様変わりしていた。ポルトガルに入るとさらに耕地は整然として、管理が行き届いている。コルク樫の畑などは、変わっていないようだが、ビニールハウスの続くところもあり、日本の畑とほとんど変わらない景観である。地中海沿岸ではないのではないかと、錯覚するほどだった。

メクネス近郊の大農園

モロッコのメクネス近郊は主要な農業地帯



メクネス近郊 小麦の刈跡地

で、畑が続く。所々でトウモロコシやメロンの栽培が行われていたが、小麦の刈り跡地など、畑の多くは夏の期間の今はおやすみ、という感がある。これは以前の地中海沿岸の風景だと思った。灌溉が行き届いていないのだろう。

その中で、メクネス郊外のBERHMIさんの農園は例外である。ワイン醸造所と倉庫のあるこの農園は300haもあり、入口の門から続く椰子の並木、噴水付きの手入れの行き届いた庭、ぶどう畑、木々の間から見える小



BERHMIさんの農園の入口



プランテーション入口とぶどう畑

作人の住宅、と真夏でも緑で一杯。地主の巨大な経済力が感じられた。ラバト・メクネス間、メクネス・フェスの間でも、こうした大農園の入り口や並木がいくつも見え、主要な農業地域の畑の多くは、大地主の所有の下にある状況が観察された。

1974年操業開始のBERHMIさんのワイナリーは、工場も倉庫もまだ新しい。植民地時代からのフランス系の地主が、新たに事業を始めたようだ。工場の入口では、フランス系らしい感じの数人の男性が商談中だった。ワイン作りの技術も木の樽も、すべてフランスから入っている。そう言えば、ガイドのハワさんは酒を飲まない。モロッコはイスラム圏では特殊で、酒に関する規制がゆるいとはいうが、イスラム教徒が大々的に酒作りはしないだろう。1956年の独立以降にもこうした農園が成立するのは、フランス系植民者やフランスが今でも多くの実権を握っている表われと思われる。

失業率20%、貧富の差が開くモロッコ社会

その一方で、巨大な国王の肖像の看板や国旗がどこにもあって、国王モハメド6世を賛美するプロパガンダが各地で行われ



ラバト 国旗だらけの中央広場

ていた。先進国の資本が発展途上国の政治や経済を、絶対的な権力を握る国王や政治家を利用して支配する手法が、露骨に見えた。それに対するモロッコ人の批判的グループもあるそうだが、この調子ではそれは極く少数派でしかなく実質的な植民地支配は問題なく継続するのだろう。ため息の



カサブランカ
ナツメヤシが街路樹の
新市街

出るような話だ。

多くの都市でモロッコ人地区（旧市街）は、植民者の街（新市街）と隔離されている。モロッコの首相の

月給は7000ドル（約84万円）だが一般市民は1500～3000ディルハム／月（2～4万円）倍率は21～42倍。日本の約5～10倍に比べ差が大きい。不平等が貧困問題の原因の一つだと思う。

失業率が20%を越えるモロッコでは、5か国語を操る私たちのガイドさんのような、大学を卒業した優秀な人でも、それを生かす仕事が続続的にあるとは限らない状態、だそうだ。カサブランカのEUの建物の掲示板には出稼ぎの許可名簿らしい紙がたくさん貼ってあり、イタリア・フランス・スペイン・ドイツなど行き先が示され、生活が掛っているらしい何人もの男性が真剣に見ていた。

新聞などによれば、スペイン南部の野菜畑の労働者の多くはモロッコ人で、低賃金で働き生活水準が低く文化も異なるので、スペイン人労働者や住民の中に差別意識が生まれ、2000年には排斥の襲撃事件も起きた。モロッコの中でも貧富の差が大きくなり、イスラム原理主義勢力が急速に伸張している。西欧に対する反発から、イラク戦争に多くの義勇兵が参加した。カサブランカで2003年5月、外国人をねらったと思われる爆発事件も起きている。中東・北アフリカのイスラム世界で、いや世界全体で、革命前のイランに似た状況が始まっているのかもしれない。



ラバト メディナ（旧市街）のなか



カサブランカ 出稼ぎ
許可名簿を見る人々